



絵雑誌の出現と子どもの国民化：  
『お伽絵解 こども』（1904創刊）を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 真由美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004894">https://doi.org/10.24729/00004894</a>

## 投稿論文

## 絵雑誌の出現と子どもの国民化 — 『お伽絵解 こども』(1904創刊)を事例として—

大橋 真由美

### はじめに

近代日本の子ども<sup>1)</sup>の国民化に関連した先行研究では、国定教科書の分析から、学校教育が忠君愛国と良妻賢母の思想形成や、家族国家観の普及に関与したと指摘されている(深谷 1966; 山住 1987; 牟田 1996)。女性の国民化に関連した先行研究では、大人用メディアの分析から、この期に盛んであった賢母教育や家庭教育の言説の流布が論じられている(小山 1991; 牟田 1996; 小山 2002)。また、賢母教育が少女雑誌に導入されていたことも明らかにされている(今田 2007; 渡部 2007)。そこから、子どもの国民化のために学校教育が推進され、それに共鳴するかたちで、さまざまなメディアが賢母教育や家庭教育に関与したことは見えてくる。

このように先行研究では、メディアを介した国民教育の問題が論じられているのだが、幼年期の子どもと家族とメディアの関係性を踏まえて、子どもの国民化を論じたものは見あたらない。そこで本研究は、選書や購入、そして絵解きの際に家族の介助を必要とする幼年用メディアに着目して<sup>2)</sup>、幼年期の子どもの国民化の一端を明らかにするものである。

幼年用メディアでは、絵が主体となり、詞はその補助であることから、作り手と読み手の双方の絵解きが、意味内容の伝達に重要な役割を果たすことになる。作り手は、想像を形象化して画面に絵解きし、印刷により複製して読者に向けて送り出す。子どもの読みを介助する読み手は、複製画面を受け取り、その意味内容を解釈して、強調や省略を加えつつ絵解きし、音声言語のみならず顔きなどの身体言語も交えながら子どもに語る。その際の想像や解釈には、時代の現象や規範などが関与してくる。読み手の立

場によって、例えば当時と現代の読み手ではその絵解きに違いがあるのは当然だが、読み手の絵解きを導くものは固定された複製画面である。本研究では、当時の読み手の絵解きを再録することは適わないため、筆者が時代性を考慮しつつ絵解きすることを通して、メディアを介した幼年期の子どもの国民化の問題を探究したい。

本稿では、子どもの国民化に関与したであろうジェンダーの問題に焦点を当て、1904（明治37）年創刊の絵雑誌『お伽絵解 こども』を事例として、そこにどのようなジェンダーが絵解きされていたかを検討する。この誌を事例とするのは、第1に日露戦争開戦年に創刊されたものであり、第2に多色刷り絵雑誌の嚆矢（大阪国際児童文学館 1993：524）であったことを理由とする。第1は、男性兵士に限った「帝国軍隊」が近代日本のジェンダー形成に関与し、日露戦争がその強化の節目になったと考えられることによる（大日方 2006）。「子どもたちに国体の尊厳を教え、忠君愛国の思想を育てていく」（山住 1987：76）ための国定教科書が、この誌創刊と同年の1904年に使用開始された。この頃は、良妻賢母思想が確立し、家庭教育の問題が社会的関心を引いた時期でもあった（小山 1991）。第2は、この誌創刊までの子ども雑誌の普及については次章で確認するとして、それまでの単色刷り雑誌に比べると、内部まで多色刷りのこの誌は、視覚面で読者に強い興味を覚えさせたのではないかと考えられることによる。このような理由から、本稿では『お伽絵解 こども』を事例とする。

以下、1章では、子ども雑誌の普及、および絵雑誌の出現を概観する。2章では、『お伽絵解 こども』の概要を示し、男女像の量的比較をする。3章では、ジェンダーの表象を分析する。4章では、そこに表象されたジェンダーの意義を問う。なお、引用は旧漢字を新漢字に変換して記載する。

## 1 子ども雑誌の出現と普及

近代的な雑誌の出現は、1869（明治2）年2月に新聞紙印行条例、5月出版条例が制定されたことに始まる。その後、『明六雑誌』（1874）などの啓蒙雑誌が登場し、『教育時論』（1885）などの教育雑誌、『女学雑誌』

(1885)などの婦人雑誌、『太陽』(1895)などの一般雑誌が次々に創刊された。では、子ども雑誌の出現はどのようなようであったか。以下、『お伽絵解 こども』創刊までに出現した子ども雑誌の主なものを確認する。

『穎才新誌』(1877)がその嚆矢として挙げられる。自由民権運動の盛んな頃に創刊されたこの誌は、初等・中等学校生徒のみならず教員などを読者層としており、読者投稿によって構成された、新聞形式4～8頁の週刊誌であった。その後、教育令制定(1879)から改正(1880)、再改正(1885)を経て、読者対象としての子どもを明確に意識した雑誌、例えば『女学雑誌』の広告を掲載した『教育 小供のはな誌』(1887)、山田美妙の関与した『こども』(1888)などが創刊された。しかしこれらは、僅かの号数しか現存していないことから、さほど普及しなかったのではないだろうか。

一方で、継続性と普及性から子ども雑誌が展開していくメルクマールとなる3誌、『少年園』(1888)、『日本之少年』(1889)、『小国民』(1889)が創刊された。これらの緒言では、『少年園』創刊号「発刊の主旨を述べ先づ少年の師父に告ぐ」は、「教育の事は独り直接なる学校教育の力に頼る可からず、家庭の教育も亦一大勢力なり、社会の教育も亦一大勢力なり、而して実に印行書類の教育に及ぼす力は是れ亦一大勢力なり」と記している。すでに家庭教育が定義され、「教育する母」が浮上しつつあった時期であるが(沢山 1990; 小山 2002)、近世を引き継ぐ「師父」はまだ健在であったことが読み取れる。『日本之少年』創刊号「本誌発行の主意を明かにす」は、「本誌ハ更に少年の父母に對かつて家庭教育の法を講ずる」と記している。ここでは家庭教育の行為者として「父母」が指定されている。この2誌は、小学校の就学率が50%に満たない時期にあって(文部省 1972)、家族による家庭教育を重視し、子ども雑誌をそのためのメディアと位置づけている。『小国民』創刊号は、「拝啓、我が幼き国民、第二の日本国民たる、幼年諸君足下」として「国民」を強調して、子どもに呼びかけている。この誌はアメリカの児童誌を摸していることから、西洋近代の国民国家意識が曲がりなりに導入されたと見なせる。

明治中期になると、雑誌を主力商品にした博文館が出版界を牽引するようになり、子ども雑誌でも同様であった。博文館刊『尋常小学 幼年雑誌』

創刊号（1891）の緒言は、「我日本国に生るゝ人は。これ日本国を守る為の人なり」と記している。この後博文館は、『少年世界』（1895）と『幼年世界』（1900）を創刊した。それを摸して金港堂書籍は、『少年界』（1902. 2）を創刊し、2ヶ月後に少女雑誌の嚆矢とされる『少女界』（1902. 4）を創刊した。これを機に、他社も少女雑誌の創刊を開始した。

明治後期になると、出版に関する生産面では、西洋の印刷技術が輸入され、印刷法が変化した（香曾我部 2001）。流通面では、交通網と郵便制度が整備され、近代的な流通が発達した（宮本 2001）。さらに日清戦争と日露戦争の戦況が国民共有の情報として即時的に視覚化され報道されて、受容面では、「感性の変容」（目黒 2001：310）が起きた。

これらは、雑誌のみならず単行図書にも影響を及ぼした。近世からの株仲間組織が再編されて、東京地本彫画営業組合（1896）と東京書籍出版営業組合（1897）が設立された。絵本の場合、幕末から営業の前者加盟の発行所が明治中期から子ども用絵本を刊行し始めたのだが、それらは表紙を多色刷りとしていても、内部を木版や銅版の墨1色刷りとしていた。ところが明治後期創業の発行所から刊行されたものは、表紙のみならず内部も石版やジंक版の多色刷りであった。前者組合では、1902（明治35）年頃に富里昇進堂、後者組合では、1904年に富山房が絵本の刊行を開始した。

このように出版文化の近代化は促進され、日露戦争開戦時になると、これらの現象は一定の普及を見るようになった。子ども雑誌にも影響が及び、加えて幼児教育が意識され、絵の比重を高めた幼年期の子ども用多色刷り絵雑誌が創刊された。1904年4月に大阪で創刊された絵雑誌『お伽絵解 こども』は、内部も多色刷りという画期的な造本形態であったことから、同業者にも衝撃を与えた。翌年には東京の業者が追従し、内部まで多色刷りの後続誌、1905（明治38）年6月に『家庭教育 絵ばなし』（尚友館）、同年9月に『少年智識画報』（近事画報社）と『少女智識画報』（同）、1906（明治39）年1月に『幼年画報』（博文館）が創刊された<sup>3)</sup>。

このような経緯から、幼年用メディアである『お伽絵解 こども』が絵雑誌の嚆矢として出現するに至った。そして絵雑誌は、同様のメディアである絵本と競合しつつ、その逐次性の利点を活かして普及していった。

## 2 『お伽絵解 こども』について

本稿で事例とする『お伽絵解 こども』(1904. 4 - 推定1911. 11)は、辻村秋峯(又男、1871-1948)の絵、久保田小塊(小吉、1871-1939)の文で構成され、両者によって設立された児童美育会<sup>4)</sup>(大阪市東区高麗橋詰町91番屋敷)を発行所としている。両者は大阪朝日新聞記者でもあったが、児童美育会と大阪朝日新聞社との関係は未詳。形式は製版法を描画法、印刷法をジंक平版として、多色刷りと墨1色刷りを交互に配置した両面印刷の四六判(18×12cm)16頁(表紙・裏表紙含む)のものであり、定価は5銭<sup>5)</sup>、発行部数は不明である。現存しているものは、1904年4月発行の1号から、1911年11月発行の8巻5号までであるが、その内、欠号5冊を除く計69冊を確認している<sup>6)</sup>。本稿では、その69冊を分析対象とする。

この誌の1巻から3巻までの開始月は4月であったが、3巻9号(1906. 12)は休刊され、次号は4巻1号(1907. 1)となり、以後の巻の開始月は1月に変更された。この誌は月刊であったが、4巻10号(1907. 11)は同9号(1907. 9)の2ヶ月後、7巻5号(1910. 5)から8巻3号(1911. 5)までは隔月、8巻4号(1911. 8)と同5号(1911. 11)は3ヶ月後となり、発行間隔は次第に間遠になっており、8巻5号がほぼ終刊と推定される。

販売方法であるが、この誌は、書店で販売され、幼稚園の賞品にも採用された。1巻1号から4巻7号までの奥付(15頁)に売捌所名が記載され、奥付周辺の頁に幼稚園名が列挙されている。4巻8号以降になると、奥付は裏表紙の外枠に移動し、売捌所名や幼稚園名は記載されなくなる。

まず販売所は、1巻1号では大阪と名古屋、2号では東京を加えて3社、3号では京都を加えて4社、4号では神戸を加えて5社、9号から奈良・博多・京城を加えて8社、さらに東京で2社増えて10社となり、創刊年間にも販路は拡大していった。その後も増加し、販売所を最も多く記す4巻7号(1907. 7)には、売捌所として大阪(盛文館、文観堂)、東京(東京堂、東海堂、上田屋、至盛堂)、京都(宝文館、三共社)、名古屋(中京堂)、神戸(吉岡支店、熊谷書店、日東館)、奈良(藤田書店)、姫路(山野書店)、

博多（積善館支店）、熊本（長崎書店）、長崎（渡辺書店）、札幌（三方園書店）、根室（山本書店）、那覇（小澤書店）、清国漢口（平岡書店）の計21社が記されている。

次に幼稚園については、1巻4号には愛珠幼稚園（1880開園）の創立記念日の記念品とされたと記され、5号には「愛珠、汎愛、浪華、中大江などの幼稚園の賞品に採用」と記されており、この方法でも販路が拡大していった。幼稚園数を最も多く記す3巻8号（1906.11）では、大阪（愛珠、集英、汎愛、船場、浪華、中大江、南大江、精華、高台、日吉、大宝、御津、桃園、金甌）14園、京都（吉祥）1園の計15園、およびその他各地の幼稚園に採用されたことが記されている。

愛珠幼稚園は、全国で4園目、大阪で2園目に開園の幼稚園であり<sup>7)</sup>、それまでの3園が官立であったのに対して、平野町などの町立による全国初の幼稚園であった。所在地は大阪経済の中心地にあり、園児の多くは商人の子ども達であった。汎愛幼稚園、浪華幼稚園なども同様であり、大阪の幼稚園児は、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主な園児であった華族や士族の子ども達ではなく、裕福な平民の子ども達であった。

このように大阪の幼稚園児を主な読者対象としたこの誌は、後には、大衆層を意識した後続誌、特に『幼年画報』の全国展開の前に惨敗せざるを得なかった。後続誌は、複数の画家を登用しているが、『お伽絵解 こども』は、秋峯が原画のほとんどを描き、画家自らが版下を描く描画法製版であったことから、その手間を考えると生産量に限界があったと見なせる。この誌は、確かな描写力と表現力、上品な美しさを備えたモダンな意匠によって構成されており、「西洋の影響の濃い明治モダニズムの漂う絵雑誌」（村川 2006：65）と評価されているのだが、販路拡大の頂点にあった4巻後半から、描線が乱れ、描写力が低下して、模写と写真が増加している<sup>8)</sup>。

内部構成では、浮世絵版画の模写もあるが、グリムの「ブレーメンの音楽隊」を「和合一致」（1巻2号）、コールデコットの絵本“BABY BUNTING”を「兎の皮」（1巻9号）とするなど、西洋の物語や絵本、ポンチ絵の翻案や改作なども掲載されている（三宅 2003）。創刊号の「幼稚園」（10-11頁）を始めとして、幼稚園に関する図像や記事も掲載され

ており、5巻5号15頁で愛珠幼稚園が写真と記事で紹介され、この巻号から幼稚園巡りを記事とした「幼稚園かがみ」の連載が開始された。また、4巻5号には読者の写真が掲載され、「児童の誕生日や幼稚園に入った時など」(15頁)の記念に写真掲載が呼び掛けられて、その後、この企画は継続されている。

この誌は性を特定しない「こども」を誌名としているが、性別の描き方に差異があるのか。まず量的比較のために、69冊の表紙子ども像の性別構成の比較を〔表1〕、同じく性別人数の比較を〔表2〕とする。

〔表1〕 表紙子ども像の性別構成

子ども像の性別構成	冊数
男性単数のもの	27
女性単数のもの	16
男女複数、男性＝女性のもの	4
男女複数、男性＞女性のもの	6
男女複数、女性＞男性のもの	3
乳児のもの	3
性別不明のもの	1
その他(動物、玩具)のもの	9
計	69冊

〔表2〕 表紙子ども像の性別人数

子ども像の性別	人数	割合
男性	41	51
女性	30	37
性別不明、乳児	3	4
性別不明、幼児	2	2
性別不明、幼年	5	6
計	81名	100%

〔表1〕〔表2〕から、表紙では男子像が優位に扱われ、その人数も多いことがわかる。この誌は性を特定しない「こども」を誌名にしているにもかかわらず、誌名を記した表紙には、すでに男女の量的差異が現れている。

次に、69冊全体に描かれた人物像の性別人数を検討したい。表紙と内部に登場する人物像の内、性を特定できる子ども像の延べ人数を〔表3〕、同様に大人像の述べ人数を〔表4〕にする(群像は概数)。

〔表3〕 69冊に登場する子ども像

子ども像	人数	割合
男性	1,285	69
女性	582	31
計	1,867名	100%

〔表4〕 69冊に登場する大人像

大人像	人数	割合
男性	779	81
女性	188	19
計	967名	100%



〔表3〕では、登場する子どもの男性像は女性像に比べると2倍以上にもなり、表紙だけの男女比よりも、その格差は開いている。〔表4〕では、大人の男性像は女性像よりも4倍以上になる。その内訳を見るために、上位5位の大人男性像を〔表5〕、同様に大人女性像を〔表6〕とする。

〔表5〕 大人男性像の上位5位

男性像	人数	割合
軍人	348	45
歴史的英雄	89	11
武士・武官	50	6
父親	41	5
旅人	41	5
その他	210	27
計	779名	100%*

〔表6〕 大人女性像の上位5位

女性像	人数	割合
母親	91	48
保母	17	9
老人	7	4
乳母	4	2
伯母	4	2
その他	65	35
計	188名	100%

\*割合は、小数点以下四捨五入のため、100%になっていない。

〔表5〕では、日露戦争の戦闘場面が繰り返し描かれていることから、軍人の群像が多い。西洋ポンチ絵の模写らしきものに、男子の悪戯を諷める父親が登場する。他には巡査、運転手、農夫など、大人男性像は多義にわたり、群像が多い。〔表6〕では、母親とその代理的な人物像が大半である。他には女官、メイド、売り子、電話交換手などが登場する。男性像の6割以上が戦闘役割に就く公領域の人物像であり、女性像のほとんどは介助役割を担った私領域の人物像である。このような大人像は、社会の構成員に関する作り手の認識であり、子どもにとってのモデル像と見なせる。

69冊に登場する親子像の性別組み合わせを見ると、父親と男子だけのものは10点、女子だけのものは2点である。母親と男子だけのものは27点、女子だけのものは10点となる。この数量差に、男性である作り手の男子中心の親子観、特に男子と母親の密着度に関する意識を見ることができる。

以上のような量的比較から、誌名では性を特定していないにもかかわらず、『お伽絵解 こども』の男性優位性を指摘できる。このような男性像と女性像の数量差には、差異の関係性としてのジェンダーを見て取れる。

### 3 『お伽絵解 こども』を絵解きする

前章では、男性像と女性像の数量的差異を指摘した。本章では、その差異の関係性に潜む作り手のジェンダー観を検討するために、筆者による絵解きを通して、第1に表紙の図像、第2に内部の図像を分析する。



【図1】 1-1、表紙 【図2】 2-1、表紙 【図3】 3-1、表紙 【図4】 4-1、表紙

第1の分析では、まず、人物像を描いた1～7巻1号の計7冊の表紙絵をサンプルとする。1巻1号【図1】は、縁側に腰掛けイヌを相手に寛ぐ男子を描いており、セーラー服という軍服様の服装で“男らしさ”を表象しているものの、股を閉じて小首をかしげる姿には“女らしさ”さえも感じさせる。2巻1号【図2】は、野に座して本を読むエプロン掛けで洋装の女子像と、その肩にもたれかかり居眠りをするセーラー服の男児像である。3巻1号【図3】は、遠景に雲と山、中景に野原に座して花を摘む女児像、近景に両手をポケットに入れて中景を眺める男子像であり、その巨大な後ろ姿は威圧的であり虚勢的でもある。この年から新年号となった4巻1号【図4】は、巨大な日章旗を掲げるセーラー服の男子像と、それを手伝う振り袖の女子像であり、眼差しを上向きとすることで日章旗の翻る空を想像させている。5巻1号は、赤い背景に、ノートに向かい眼差しを伏せた女子の上半身のデッサン画を組み込んでいる。6巻1号【図5】は、エプロンにタマゴを包み込んだ洋装の女子とニワトリを描いている。7巻1号は、赤い背景に、イヌを抱き麦わら帽子を被った和装の男子の写真を

組み込んでおり、写真である分、それまでよりも庶民的な様相となっている。



〔図5〕 6-1、表紙 〔図6〕 2-7、表紙 〔図7〕 4-8、表紙 〔図8〕 5-9、表紙

次に、69冊の表紙絵を概括すると、1～2巻では、多様な視角による豊かなイメージが展開されている。2巻7号〔図6〕は、赤色ワンピース姿で颯爽と自転車漕ぐ女子像であり、新奇な乗物に乗り真っ直ぐに突き進む正面像には、強い好奇心と意志が込められている。69冊中、最も主体的と言えるこの女子像や、〔図1〕の男子像には、一般的に認識されている“女らしさ”や“男らしさ”のジェンダーに囚われない子ども観を感じる。しかし3巻では、〔図3〕で子ども像の男性／女性＝大／小と格差が描き分けられているように、ジェンダーが顕在化する。4巻になると、〔図4〕の日章旗などによって、そこにナショナリズムが付加されていく。女子像では、4巻8号〔図7〕のように、“女らしさ”を強調して、顔にスポットを当てたアップの図像や、眼差しを横向きや下向きにするなどの閉塞感のある図像が増加する。一方で男子像では、兵士のひな形のような図像が1～8巻を通して均等に出現しているのだが、4巻以降では、その様相はより具体的になる。5巻9号〔図8〕の陸軍の軍服を着用しラッパを吹く男子像には、男子を将来の兵士となる人材と見なした作り手の認識を指摘できる。

第1の分析では、次第にジェンダーの表象が顕在化していくことを示したが、そこに潜むナショナリズムの表象も見えてきた。そこで第2の分析

では、ジェンダーがナショナリズムと結び付く様相を見ていきたい。

まず、1巻1号の第1場面2-3頁〔図9〕を取り上げる。詞は、「ドシヤこゝにあるよ／ドシヤ打つてやろ／泣面をかちいな／日本強い。坊は／日本の児／伯父さんも／兵隊さんも日本の児」、「地球儀まるいな。くる／まはれ。／手鞠もまるいな。ころ／ころべ。／地球と／手鞠と／くる／ころ／まはつた／ころんだ」と記されている。絵では、右頁下部の男子は、手に玩具の銃を持ち、セーラー服を着て木馬に乗った姿で描かれている。上部に陸軍の帽子とラッパ、男子の眼前に大きな地球儀が描かれており、銃口は中国大陸に向けられている。左頁上部の女子は、和装にエプロン掛け、椅子の後ろの台の上に立ち、前方を見つめている姿で描かれている。足下に糸鞠が転がっている。



〔図9〕 1-1、2-3頁



〔図10〕 2-2、5頁

この男子は、地球儀が表象する世界という開かれた外に身体を向けている。セーラー服は海軍、木馬は陸軍の記号であり、「坊」は「兵隊さん」同様に「日本の児」とされている。つまりこの男子は、国家の内にアイデンティティーをおきつつ侵略に向かう存在として、その未来の方向性を定められている。一方で女子は、窓枠のような背もたれの後部、すなわち室内に閉じ込められているようである。糸鞠は女子の室内遊びの記号であり、エプロン掛けのこの女子は、家庭の内に居ることを標しづけられている。

次に、2巻2号5頁〔図10〕を取り上げる<sup>9)</sup>。外枠上部に「わかば」の標題、右側に「花子わ花に水をやり 太郎わ大将の旗を持つ」、左側に「花

子の心愛らしや 太郎の心勇ましや」のキャプションが記されている。そして、前景に花に水を遣る女子の正面像、後景に旭日旗を持つ男子の背面像が描かれて、緑色濃淡で彩られた林の向こうには薄青色の空間が拡がり、男子の向かう空や海が示唆されている。



[図11] 1-2、5頁



[図12] 1-12、5頁



[図13] 5-5、表紙

つまりここでは、女子は“育てる身体”、男子は“戦う身体”で描かれている。これが作り手のジェンダー観であると見なせることから、このような図像を他に探せば、1巻2号5頁 [図11] が該当する。男子は兵隊ごつこのために旭日旗の下に整列しており、年長の女子は赤ん坊を背負い、年少の女子は人形を抱いて見物している。1巻12号5頁 [図12] では、鄙飾りと飯事道具の前で、人形を背負った年少の女子が女学生らしい少女の背にもたれている。その図像は異世代の女性間で“育てる身体”を伝達しているかのようである。5巻5号表紙絵 [図13] も、「わかば」同様の林の中から薄青色の空間の拡がる外に向かいヨットの玩具を引く、セーラー服を着た男子の背面像である。この図像は、海軍の遠征を想起させる。

他の巻号にも、男子の兵隊ごっこや軍服様の服装の図像は多く、女子の子守りや人形遊びの図像も多い。これらも“戦う身体”と“育てる身体”の表象である。そして、前述した [表5] の大人男性像と [表6] の大人女性像も同様であり、大人像と子ども像のジェンダー表象には整合性がある。

そして、この誌は日露戦争開始年に創刊されたことから、創刊号には、

戦争や国家を強調した図像や記事が満載されている。4頁の神武天皇と金鷄勳章の図〔図14〕、7頁の「<sup>にっぽん</sup>日本が<sup>いくさ</sup>ロシアと戦争するといふ<sup>おほせ</sup>御宣言の<sup>ことし</sup>出たのは今年<sup>きげんせつ</sup>の二月十一日<sup>ひ</sup>紀元節の日です」の説明文、8-9頁の大日本帝国軍人を中心に描いた「<sup>せいかくこくじん</sup>世界各国軍人」の図〔図15〕などはナショナリズムの色濃いものである。また、14頁には「<sup>どうぶつ</sup>動物も<sup>ひと</sup>人間と同じやうに<sup>おなじやう</sup>時々<sup>ときどき</sup>戦争をいたします」と記されており、動物の争いも「戦争」と表記されている。



〔図14〕 1-1、4頁



〔図15〕 1-1、8-9頁



〔図16〕 3-1、5頁

その後の巻号についても、2~8巻1号の計7冊をサンプルとして、そこに表象された戦争と国家のテーマを検討する。2巻1号では、3頁の檀原神宮参詣の男子群像には、「今日わ丁度四月三日<sup>きょー</sup>神武天皇祭！<sup>ちよーどし</sup>サーー<sup>が</sup>所<sup>つみつか</sup>に御参詣<sup>じん</sup>いたしましよー<sup>むてんの</sup>。そして日本軍のますます<sup>さい</sup>大いに勝つよー<sup>いっ</sup>祈りましよー」の詞が添えられている。4巻1号では、1頁と3頁と8-9頁に日章旗が描かれ、10-11頁「尾津の浜松」に日本武尊の東征が記されている。5巻1号では、15頁にイヌの置物に跨りラップを吹く軍服様の洋装の男子写真が掲載されている。6巻1号では、8-9頁に「錦の御旗」を取り返す村上義光が描かれ、10-11頁に護良親王に仕える義光の忠義が説明されている。7巻1号4頁「練兵あそび」では、雪の日に軍服姿の男子3名が銃を構えて兵隊ごっこを行っている。8巻1号では、2-3頁「御幼年の皇族」に「迪宮裕仁親王殿下」以下18名の子ども皇族の写真が掲載され、4頁「小楠公の幼時」に楠木正行の幼年期の戦遊びが描かれ、6-

7頁に「久邇宮良子女王殿下」以下10名の子ども皇族の写真が掲載され、8-9頁「キユジヨウニジウバシ」に二重橋を背景にして陸軍大将と金鷄勲章が描かれている。

このように、戦争と国家のテーマに登場する人物像のほとんどは男性像である。神話的天皇・親王と幼年皇族、および国旗によって国家が表象され、歴史的英雄や軍服姿の男性像によって国家への忠義が示されている。

しかし中には、勇ましい女子像を描いたものもある。3巻1号の5頁「軍艦あそび」[図16]には、旭日旗を頂点にした三角形の構図で男子2名と女子1名が描かれている。6-7頁では、詞は「太郎たろー司令長官しれいちよーかん。次郎じろーは士官候補生しかんこうほせい。花ちゃんはなと女おんなだけさんぼーれど参謀いざになって勇ましいグンカンアソビ。」と始まり、太郎の命令は「忠君愛国の強い見事な精神がこもっているから」、大砲の弾は「敵の軍艦に命中」とされている。

この他の巻号、例えば1巻10号8-9頁、6巻4号9-10頁の戦争ごっこにも女子が参加している。後者は前者の構図の一部を取り出して一枚絵としたものであり、これらでは、机が裏返されて軍艦に見立てられ、男子が舳先に立ち双眼鏡を覗き、女子がオールを漕いでいる。大きくまた多く描かれているのは男子像であるが、女子像も兵力の一部と見なされている。

女子像に参謀という重要な役割を与えているのは3巻1号だけであるが、戦争ごっこには女子像も散見される。ここから、日露戦争の興奮冷めやらない時期にあって、“育てる身体”を持つ女性であっても、国家の非常時には“戦う身体”を持ち得るとした作り手の認識を見て取れる。

このように1-8巻1号の全てに戦争と国家のテーマが表象されており、これ以外でも同様である。1-3巻では戦闘場面を描いた戦争のテーマが多く、4巻以降では国旗や皇族、忠君愛国の表象などの国家のテーマが多くなる。新聞記者関与のこの誌は、7巻2号の「韓国ちゆうせんの皇太子殿下こうたいしでんか」や、8巻2号の「第二回大阪こども博覧会」などの時事的な内容も掲載し、帝国日本の優位性や先進性を誇っている。このようなナショナリズムは、ジェンダーと結び付けられ、さまざまに形象化されて69冊全てに出現している。

#### 4 要望された主体性

2章では、数量分析から男女像の差別的関係性を示し、3章では、図像分析からナショナリズムと結び付いたジェンダーの表象を明らかにした。本章では、そのようなジェンダーの意義を問うことにする。

まずこの誌の作り手は、創刊号で「太郎さん僕は小塊……花ちゃん僕は秋峯……僕等はこの雑誌『こども』のお友達です」(15頁)と記している。そして3巻6号で「学校教育と共に家庭教育が盛に唱えられ児童ということが重く研究せられるよーになつたのわ誠に結構でございます」(14頁)と記している。さらに金井信生堂や博文館が絵本刊行を開始した1908年、創刊5年目の5巻4号で児童美育会の理念を説明するに至った。

第一にこれを読んで下さい

「児童美育会」わ児童の幸福を進むるため、智識趣味を増すため。太郎の父。花子の母の理想によって組織せられたものです。

雑誌「こども」の発刊わ美育会の理想中の一つの事業です

「こども」わ明治三十七年発刊です。今年で五年になります

「こども」わ現代に於ける彩色お伽絵本の元祖です。お伽絵本改良の先頭者です  
主任 久保田小塊 辻村秋峯 (2頁、句点はママ)

ここで言う「太郎の父」と「花子の母」は、一般的な父親と母親と解釈できる一方で、1巻1号第1場面[図9]の「日本の児」の表現を加味すると、「父」を「国父」、「母」を「国母」とする解釈も可能である。しかし、作り手が家族国家観に支配されていたとしても<sup>10)</sup>、読み手の全てが「国父」や「国母」を連想したとは考え難い。したがってこれらは、国家を構成する国民としての理想的な父親と母親の意味と解釈することが妥当であろう。すなわち、児童美育会は国家にとって理想的な国民像の形成を目指して組織された会であり、『お伽絵解 こども』はそのような児童美育会から国民に向けて絵解きされた家庭教育書であったと言えるのである。



日露戦争開戦時に創刊されたこの誌がナショナリズムに強く支配され、特に男子像にそれが顕著であったことは、これまでに見てきた通りである。しかし、女子像にもナショナリズムが潜んでいる可能性も指摘してきた。

そこで改めて、1巻1号の第1場面〔図9〕を見直したい。前述したようにここには、外に向かう男子像、内に居る女子像が描かれていた。しかしこの女子像は、見開き頁の左上に居り、台に乗り背伸びして高い位置から男子像を見下ろしているようでもある。窓に見立てた椅子の背を通して見つめているのは、男子像よりも地球儀である。つまり彼女は、家庭内に留まることに満足しておらず、男子と同様に、あるいは男子を介して世界と繋がろうとする欲望や願望を抱いているとも解釈できる。すなわちこの女子像から、女性は、家庭内に留まることを強要されていた一方で、主体的に世界と関わることを要望されていたと読み取ることも可能である。

女性と世界との関係をさらに考察するために、もう一図、3巻6号5頁〔図17〕を見ていきたい。上部に「貞ちゃん」と記されて黒っぽい枠で縁取られたこれは、辻村秋峯画の既存の絵葉書を転写したものである。



〔図17〕 3-6、5頁

まずこの絵葉書は、「台湾日日新報」の新年号の付録とされた(1905)。満州軍総参謀長・児玉源太郎(1852-1906)が、そこに「貞ちゃんは欲しいか旅順」と書き込み、孫娘・貞子(1905当時、東京在住)に戦地から軍事郵便で送った。そのことが「国民新聞」の記事となった(1905)。さらに『お伽絵解 こども』3

巻6号5頁に、宛名面の日付スタンプ(M38.1)を同一画面に組み込むなどして、秋峯の手で改めて構成されて掲載された。この誌の刊行時、2ヶ月前に児玉源太郎は死去し、貞子の父は韓国総督府書記であった(1906)。このような記事が、6-7頁に掲載されている。

この絵葉書で、赤い着物の可愛い女児は「貞ちゃん」と名づけられた。女児は、少年の差し出す兵隊人形に手を伸ばして“欲しい”気持ちを示している。すると少年は「欲しいか」と語りかける児玉源太郎、兵隊人形は「旅順」となる。児玉は軍隊の指揮官であったことから、少年も指揮官となり、

「貞ちゃん」は、指揮官から人形に表象された兵士と共に「旅順」も受けとることになる。すると「貞ちゃん」は、指揮官に託されて兵士を“育てる”のみならず、兵士を介して植民地を“欲する”存在となる。

絵葉書のままであれば、「貞ちゃん」は児玉源太郎の孫娘という個人的な存在に留まっている。しかしこの誌に転写されたとき、「貞ちゃん」は、個人的な存在ではなくなり、「欲しいか」と問いかけられて“欲しい”と手を伸ばす女性の表象＝代表、すなわち兵士を育て、国土拡張の欲望を示す主体となった。つまりここでは、「貞ちゃん」は“欲する身体”として主体化され、少年は“与える身体”として主体化されているのだが、そこに“望まれて”の要素を加えることで、少年を客体化するという主客転倒が仕掛けられている。言い換えればここには、“欲する”ことで侵略を誘導するという使命を担った参謀としての女性像と、“与える”ことで愛すべき者のための侵略であると大義名分化する男性像が絵解きされている。

しかしこのような男女像は、国民として国家に回収されるものであることから、このような転倒も、主体である国家に回収される国民という客体の中で生じているに過ぎない。つまり、この時期の女性に要望された主体性とは、家庭にあっても国家のために兵士となる男子を育て、その兵士を介して植民地を欲する存在としてのそれであった。すなわち、この誌で性を問わず子どもの国民化に要望されていたのは、国家のための主体性であり、描かれていたのは、ナショナリズムに支配されたかたちにジェンダー化された主体であったのである。

## おわりに

以上のようにこの誌には、“戦う身体”の男性像、“育てる身体”の女性像という差別的関係性としてのジェンダーが表象されていたが、さらに検討すると、いずれにも国家のための主体性が要望されていたことが見えてきた。総括すればこの誌には、子どもの国民化のために必要と見なされたナショナリズム的なジェンダーが絵解きされていた。

この誌では、漢字にルビが打たれて子ども自身の読みも意識されていた

が、幼年用メディアとして介助する家族を必要としたことも否めない。ところがこの誌には、メディアと子どもをつなぐ家族の介助役割を明確に指示した表現を見出すことはできなかった。母子像は多かったが、家庭外の母子像や家庭内の父子像もあり、この誌には、母親に限定されない家族と子どもの関係性が表象されていた。この点を踏まえると、この誌に表象されたナショナルリズムのジェンダーは、子どもの教育に関心を抱き、理想的な父親や母親であろうと志していた家族によって、作り手の意図を解釈して絵解きされ、幼年期の子どもの国民化に関与したと考えられる。したがってこの誌は、絵雑誌の嚆矢としてのみならず、幼年期の子どもの国民化を意図した家庭教育書の嚆矢にもなったと言える。

この後、太平洋戦争時の戦時統制期（1938-1945）に、内務省が内容解説のための「母の頁」設置指示を含む「指示要綱」（1938）を発行者に通達し、統制のための検閲を行ったように、メディアと子どもと家族の関係性の確立は、家庭教育における子どもの国民化にとって必要不可欠のものである。そのような関係性において、どの時点で介助役割を担う者が「母」に限定され、その「母」が介助のみならずより積極的に作り手の意図を絵解きする存在として位置づけられていったのか。そのような検討を、今後の課題としたい。

### 【註】

- 1) 本研究で“子ども”と見なす者は、明治・大正期の中等教育修了程度の年齢（満17歳）を上限としている。子ども像を示す際に、子どもの男性／女性を年齢別（満年齢）に、0歳児頃を性別不明の乳児、1～2歳児頃を幼児期として男児／女児、さらに尋常小学校低学年（6～7歳）までを規準にして、3～7歳児頃を幼年期として男子／女子、8～17歳児頃を少年期として少年／少女と表記する。画像分析のため年齢の特定は困難であり、これらの表記は便宜上のものである。
- 2) 幼年期の子どもの絵本や絵雑誌に接するとき、選書や購入、そして現在に「読み聞かせ」と呼ばれる行為など、大人の介助を必要とする。本研究では、子ども1人の読みも含めて、絵を読む行為を“絵解き”と呼ぶことにする。『日本国語大辞典 第二版』によると、“絵解き”には4つの意味がある。その内、作り手は、「③文字の代わりに絵や図を主体にして事柄を

わからせようとするもの。また、その方法。」の意味で画面に絵解きする。読み手は、「①絵の意味を説明すること。また、そのことば。」の意味で画面を絵解きする。つまり“絵解き”は、作り手と読み手の双方によって行為されるものである。

- 3) 『幼年画報』編集者の木村小舟は、『お伽絵解 こども』は「頗る面白い試み」であり、「この小雑誌にヒントを得た博文館は、新たに最低学年用の絵雑誌を創刊すべく鋭意企画を進めることゝなった」と記している（木村 1949：269-270）。
- 4) 『日本国語大辞典 第二版』によると、「児童」には「①心身ともまだ十分に発達していない者。こども。わらべ。童児。現在は、特に小学校に学んでいる子どもをいう。学童。②児童福祉法で、18歳未満の者。乳児、幼児、少年に分ける。」の意味、「美育」には「芸術的教育の総称。美の鑑賞と創造を通して、望ましい人間形成をはかるための教育。知育、徳育とともに教育上の重要な内容を形成する領域。美的教育。」の意味がある。これらから「児童美育会」は、教育的かつ芸術的な組織であることを強調した名称と考えられる。なお「児童」には、発行所名では「じどう」、本文では「こども」のルビが打たれている。
- 5) 明治末期の物価は、公務員初任給55円、大工日当1円、清酒1本17銭であった（週刊朝日編 1988）。この期の絵本・絵雑誌の定価は5～15銭、『幼年画報』は10銭であったことから、この誌の5銭の定価はやや安価と言える。
- 6) 創刊号～7巻1号（1巻8号欠号）の60冊は梅花女子大学図書館、7巻2号～8巻5号（7巻4、6～8号欠号）の9冊は大阪府立国際児童文学館に所蔵されている。
- 7) 1898年の全国の幼稚園総数は229園であったが、「幼稚園保育及設備規定」（1899制定）により、その普及は促進された。増設数は、20世紀初頭に163園の増加、1908年以降10年間に291園の増加、1909年に全国最後の岐阜県に設置されて、幼稚園は全国に普及した。5歳児就園率の全国平均は、1906年に14%、1910年に2%台、1924年に3%台と推移した（文部省 1979：118-126）。
- 8) 「秋峯」の署名がほとんどだが、5巻より「秋湖」の署名が散見される。この期になり、もう一人の画家の登用と描画法製版の下請けが模索されている。
- 9) この図は、フリードリッヒ・フレーベルによる家庭教育書『母の歌と愛撫の歌』の「遊戯の歌」挿絵、「小さな園丁」の構図に酷似している（小原 1981：189）。
- 10) 天皇と国民を親と子の関係に擬した家族国家観は、「御真影」や「教育勅

語」、修身教科書を介して、明治末期の多くの日本人を支配していた（伊藤 1982）。

### 【参考文献】

- 伊藤幹治 1982 『家族国家観の人類学』 ミネルヴァ書房。
- 今田絵里香 2007 『「少女」の社会史』 勁草書房。
- 上野千鶴子 1998 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社。
- 大阪国際児童文学館編 1993 『日本児童文学大事典 第二巻』 大日本図書。
- 大橋真由美 2001 「金井信生堂 一創業期刊行絵本を中心に」 鳥越編2001：175-190。
- 落合恵美子 1989 『近代家族とフェミニズム』 勁草書房。
- 小原國芳・庄司雅子監修 1981 『フレーベル全集第五巻 続 幼稚園教育学／母の歌と愛撫の歌』 玉川大学出版部。
- 大日方純夫 2006 「「帝国軍隊」の確立と「男性」性の構造」『ジェンダー史学』2：21-33。
- 木村小舟 1949 『改訂増補 少年文学史 明治篇下巻』 童話春秋社。
- 香曾我部秀幸 2001 「明治期における印刷技術の変遷と絵本」 鳥越編2001：89-106。
- 小山静子 1991 『良妻賢母という規範』 勁草書房。
- 1999 『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房。
- 2002 『子どもたちの近代—学校教育と家庭教育』 吉川弘文館。
- 沢山美果子 1990 「子育てにおける男と女」女性史総合研究会編『日本女性生活史 第4巻』 東京大学出版会：125-162。
- 週刊朝日編 1988 『値段史年表 明治・大正・昭和』 朝日新聞社。
- 千葉慶 2002 「近代神武天皇像の形成 —明治天皇=神武天皇のシンボリズム」『近代画説』11：96-126。
- 鳥越信編 2001 『はじめて学ぶ 日本の絵本史I』 ミネルヴァ書房。
- 深谷昌志 1966 『良妻賢母主義の教育』 黎明書房。
- 三宅興子 2003 「比較児童出版美術史・事始め」日本児童文学学会編『メディアと児童文学』 東京書籍。
- 宮本大人 2001 「近代における出版・流通と絵本・絵雑誌」 鳥越編2001：71-88。
- 牟田和恵 1996 『戦略としての家族 —近代日本の国民国家形成と女性』 新曜社。
- 村川京子 2006 「絵雑誌『お伽絵解こども』の美育観」中川正文監修『児童

文化の伝統と現在Ⅲ』ミネルヴァ書房：59-87。

目黒強 2001 「絵雑誌と情報化社会」鳥越編2001：309-322。

文部省編 1972 『学制百年史 記述編、資料編』ぎょうせい。

————— 1979 『幼稚園教育百年史』ひかりのくに。

山住正巳 1987 『日本教育少史 一近・現代』岩波書店。

湯川嘉津美 2001 『日本幼稚園成立史の研究』風間書房。

若桑みどり 1995 『戦争がつくる女性像 一第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房。

————— 2001 『皇后の肖像 一昭憲皇后の表象と女性の国民化』筑摩書房。

渡部周子 2007 『〈少女〉像の誕生 一近代日本における「少女」規範の形成』新泉社。

\* 図版は、梅花女子大学図書館蔵書を使用した。資料調査は、財団法人トヨタ財団研究助成によるものである。ここに記し、感謝したい。

キーワード：絵雑誌、子ども、ジェンダー

(picture magazines, children, gender)